

語学研究所 定例研究会「ヴォイスとその周辺」
日本語——動詞〔ラレル〕形・〔サセル〕形と「動詞の自他」——

川村 大

動詞〔ラレル〕形：動詞未然形＋ユ・ラユ、ル・ラル、レル・ラレル等

動詞〔サセル〕形：動詞未然形＋ス・サス、セル・サセル等 ※「動詞＋シム」形はしばらく棚上げ

1 有対他動詞・有対自動詞の周辺形式としての動詞〔ラレル〕形・〔サセル〕形

「動詞の自他」：語基を同じくする自動詞・他動詞の対

その多くは、格配置と意味の上で下記のような対応関係をもつ。

《モノ（対象物）》ガ 自動詞 （モノの無意志的变化等）
《行為者》ガ 《モノ（対象物）》ヲ 他動詞 （対象の変化を引起す行為）

◎ 自他对立のタイプ（例は、上代に仮名書き例があるもの。左が他動詞、右が自動詞）

I 活用の型の違いによる対立

イル（入 下二）ーイル（入 四） キル（切 四）ーキル（切 下二）

II 同一語基につく派生接辞による対立

ナス（成 四）ーナル（成 四） ヨス（寄 下二）ーヨル（寄 四）

III(1) 元の動詞と派生他動詞との対立

チラス（散 四）ーチル（散 四） トヨモス（響 四）ートヨム（響 四）
オコス（起 四）ーオク（起 上二） ツクス（尽 四）ーツク（尽 上二）

III(2) 元の動詞と派生自動詞との対立

カク（掛 四）ーカカル（掛 四） ウム（生 四）ーウマル（生 下二）
アグ（上 下二）ーアガル（上 四） コム（籠 下二）ーコモル（籠 四）

IV 自他同形

オク（置 四）ーオク（置 四） ソソク（注 四）ーソソク（注 四）

動詞〔サセル〕形は、III(1)のような派生他動詞由来と考えられ、動詞〔ラレル形〕はIII(2)のような派生自動詞由来と考えられる。

形成法が似ていることから、日本語においては〔ラレル〕形と〔サセル〕形をひとつの範疇として扱うことに積極的な動機がある。

2 動詞〔ラレル〕形と派生自動詞との違い

しかし、〔ラレル〕形は、格配置の型の上でも、意味の上でも、無意志自動詞述語からの単純な拡張

とは言い難い。

いわゆるヴォイス形式と言えるのは、[ラレル] 形のうち一部用法に過ぎない。

◎ 格配置の面

《行為者》項を文中に明示し得る。〈自発〉〈可能〉〈尊敬〉を表す場合には降格すらしめない。

《対象》項をヲ表示し得る場合がある。

下線：[ラレル] 形述語 破線：《行為者》 波線：《被影響者》《対象》

- (1) 〈受身〉 a 古ささきし我や はしきやし 今日やも見らにいさにとや思はれてある (今日八方子等丹五十狭迹迹哉所思而在) (万 3791) ※直接受身文
(その昔こうもはなやかだったわたしが なんということだ 今日は皆さんにほんとかしらと思われているのか)
- b 石川の高麗人に帯を取られて (於比乎止良礼天) からき悔いする (催馬楽 呂 石川) ※間接受身文
(石川住まいの高麗人に帯を取られてひどく後悔している)
- (2) 〈自発〉 花どものしほるるを、いとさしも思ひしまぬ人だに「あなわりな」と思ひ騒がるるを、…… (源氏 野分)
(花々がしおれるのを、それほど (花に) 関心を持たない人でさえ「ああひどい」と心騒がずにはいられないのに、……)
- (3) 〈可能〉 宰相の君は、よろづの罪をもをさをさたどられず、…… (源氏 若菜上)
(宰相の君 (= 柏木) は、(女三宮の) 様々な欠点にもほとんど思い至ることができず、……)
※この例、正確には〈意図不成就〉(→ 〈不可能〉)
- (4) 〈尊敬〉 「大納言の、外腹の娘を奉らるなるに、朝臣のいつき娘出だし立てたらむ、何の恥かあるべき」(人々 (源氏?) 一惟光) (源氏 少女)
(「大納言が、側室腹の娘を (五節の舞姫に) 差し上げられるとのことだから、朝臣 (ここでは二人称) の大事にしている娘を (舞姫として) 出したとして、そのことは何の恥があるのか」)
- ※ 〈自発〉〈可能〉の場合は、《対象》項をガ・ノ表示する場合もある。

◎ 意味の面

〈受身〉〈自発〉〈可能〉〈尊敬〉等の多義。かつ、(表現上の) 意味同士の拡張関係は問えない。

◎ いわゆる「受身文」

古代語和文の「受身文」は、通常言われる passive 概念では過不足なく捉えることができない。

- ・ 間接受身文が存在する ((1) b)。
- ・ 《被影響者》としての有情者が主語に立つのが普通。
- ・ いわゆる非情物主語受身文は「受身文」総例の 10%程度 (作品によって幅がある)。かつ、3タイプに限定。

- (5) a 擬人化タイプ 世の中はいかに苦しと思らむこころの人に怨みらるれば (古今 1062)
(世の中はどれほど苦しいと思っているだろう 大勢の人に恨まれているから)

b 潜在的受影者タイプ 「……。なほ、才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強うはべらめ。……」(源氏—大宮)(源氏 少女)

(「……。やはり、漢学の学問を基としてこそ、実務的な才覚が世に用いられる方面も強うございましょう。……」)

c 発生状況描写タイプ つとめて、その家の女(め)の子ども出でて、浮海松の浪によせられたる拾ひて、いゑの内に持て来ぬ。(伊勢 87段)

(早朝、その家に仕える女の子たちが(浜に)出て、浮かんだ海松が波に打ち寄せられたのを拾って、家の内に持ってきた。)

(5) a b……有情者主語受身文に準じる。

c……正真正銘の非情物主語受身文と言えるが、形態・構文上の制約等がある。

- ・述語の形態がタリ形か基本形。有情《行為者》は文中に現れない。
- ・有情の受身に比べて遅い成立であった可能性が高い。

※本格的な非情物主語受身文は、欧文直訳体の影響で近代以降一般化。

[ラレル] 形述語文の一用法としての「受身文」は、有情物主語のもの(+ (5) a bタイプ)に限定し、(5) cタイプは「発生状況描写用法」という別用法と位置付けるのが適当。

「受身文」は(述語の形態と共に)意味によって再規定するのが適当(他の用法が意味によって規定されることから)。

受身用法:[ラレル] 形述語の用法のうち、主語者が、自分の意志とは関係なく、事態(他者の行為や変化)から何らかの影響を被ったと感じることをあらわすもの

発生状況描写用法:[ラレル] 形述語の用法のうち、他者の何らかの行為の結果、主語に立つモノにおいて生じた状況を描写するもの

3 [ラレル] 形の形態対応の意味

[ラレル] 形述語文:「場における事態全体の生起」という特別な捉え方に対応する文形式

(尾上圭介(2003他)「出来文」)

(第一) 主語は「事態出来の場」……本来は有情者のみ。

発生状況描写用法のみ非情物。ただし、歴史的に後発?

cf. [サセル] 形述語文:「主語(有情者)による事態の引き起こし」の表現形式

主語者の作用が及ぶのは、実態上の《行為者》ではなくて、事態か?

主語に立つ“ヒト”の、発生する(自己あるいは他者の)事態への“特殊な関与の仕方”を述べるという点に、[ラレル] 形・[サセル] 形の共通性が見いだせるか?

問題提起

- (1) 各言語のいわゆるヴォイス形式は、何に由来しているか。
- (2) 当該形式は、どれだけの用法を持つか、すべてヴォイスと呼ばれるべき用法か。また、passive と呼ばれる用法の内実は何か。それは通常言われる passive と同じか、異なるか。
- (3) 当該形式は全体としてどのようなことをしている形式と言えるか。それは、(1)とどのように関係しているか。

文献

- 尾上圭介 2003 「ラレル形の多義性と主語」『言語』32巻4号
- 川村大 2005 「ラレル形述語文をめぐって——古代語の観点から——」『日本語文法』5巻2号
- 川村大 2012a 『ラレル形述語文の研究』くろしお出版
- 川村大 2012b 「動詞ラレル形述語文と無意志自動詞述語文との連続・不連続について」『国語と国文学』89巻11号
- 早津恵美子 2012 「日本語における「ヴォイス」を再考するために—主語が動きの主体か否か—」『日中言語研究と日本語教育』5

資料 古代語（和歌・物語など和文系統）ラル形述語文の格表示

用法	《行為者》	《対象》	備考
自発	φ	φ・ノ・ガ・ヲ	自動詞も可。また、知覚・感情・認識の動詞以外も可。
意図成就 可能			
発生状況描写	ニ	φ・ノ・ガ	主語である《対象》は非情物。
受身		φ・ノ・ガ	主語（φ・ノ・ガ格）は《対象》でもある《被影響者》（有情者）。
		φ・ヲ等 （間接受身）	間接受身文では、主語は《対象》ではない《被影響者》。
尊敬	φ・ノ	φ・ヲ等	